

# 保育専攻大学生の家族観と食生活

## —「家族支援」でのアンケート調査の考察から—

小久保裕美\*

### 1. 研究の目的と背景

本研究の目的は2015年度に「家族支援」を受講した保育専攻の3年生の学生71名に行なった家族観と食生活の実態のアンケート結果を示し、保育専攻の学生の家族観と食生活の実態を明らかにする。また、この結果をどのように授業で取り上げれば、学生にとって意味があるものになるのかを検討し考察する。そして、今後の「家族支援」講義の展開の一助とする。なお、次年度の講義では今回の検討課題を踏まえて、より効果的なアンケートを作成し授業に生かしたいと考えている。なお、学生の家族観については参考のために2016年度に実施したアンケート結果も入れた。このアンケートは2012年から実施している。

昨今の家族を取り巻く環境は少子高齢化の進展、地域のつながりの希薄化、経済格差の広がりなど多くの課題がある。加えてIT化やグローバル化が進んだことにより、家族を取り巻く環境はより複雑な様相を呈してきている。子どもに特化した問題としては、子どもの貧困率の上昇や児童虐待の増加などがある。そのなかで家族自体も変化し多様化してきているといえる。

このように家族そのものが変わってきていることを学生に講義する際、どのように伝えと彼らが理解しやすいのか、家族問題に関心を抱くのか、毎年試行錯誤しながら授業を行っている。

試行錯誤の試みの一つが、学生へのアンケート調査を授業に生かす試みである。家族のことや食のことを考える時に、学生が自らの体験を通して主体的に取り組めるようになることを考えた。アンケート調査はシラバスに明記した。2016年度のシラバスでは、1週：家族について考える（統計から）、学生へのアンケート、2週：家族支援の基本的な視点、第1回目のアンケート結果を含めて家族について考える。3週：家族の機能、4週：現代家族について、食事に関するアンケート、5週：子どもたちの食卓を考える（DVD）としている。初回授業でこの試みについて学生に伝えている。

アンケート結果を授業に用いた2回目授業では、多様な家族について広く考えるため様々な分野の文献を紹介している。なかでも若者について記述されている文献は欠かせない。学生の今を著しているとともに、子どもたちの親世代の特性を考える上でも参考となるからである。例えば、社会学者の山田（2013：105）は、昨今の親世代である若者の特質を個人化と命名している。それは学生の現在の姿や思いと相通じるものなのか、学生のアンケート結果を取り上げながら授業を進めた。

食生活の実態調査の結果は、4週目の授業で学生に調査結果を示している。アンケート結果を明示したあとで、NHKアーカイブス「子どもたちの食卓」を視聴し、岩村暢子『変わる家族変わる食卓』（勁草書房）の一部を取り上げ、時代とともに変化する子どもについて考えた。

一方、この講義では現代家族の状況を理解するとともに家族への支援の在り方と向き合い方についても考えることが必要だ。何故なら、保育所における保護者への支援は保育士等の業務であると平成20年の「保育所保育指針」で定められたからである。保護者からの相談にのるとき、彼らにはどのような姿勢で支援に臨むかが問われる。援助をする際の援助者の姿勢『ケースワークの原則』を著わしたバイスティック（1996：75）は、7つの援助原則の一つに「援助者は自分の感情を自覚して吟味する」と、援助者が

\* 東海学園大学教育学部教授

自らの感情を自覚することの重要性を述べている。このことは援助をするときに、援助者が自分自身の中に生じた様々な感情を吟味し、その源を自分でわかることの大切さを示したものである。それは、今まで育った、学んだ、働いてきた環境のなかで培った価値観や家族観、生活観を意識して認識しておくことが大切だということにも繋がる。

保育士が様々な価値観をもつ保護者と出会うときに、自分自身の理解の域を超えることもあるだろう。そういう時にこそ何故、自分がここで嫌な気持ちになったり、不安な気持ちになったりするのかわ、その都度自分の感情への応答が出来るよとよいということである。例えば、自分には自分の家族観がある。複雑に入り組んだ家族背景をもつ母親と話しているときに、母親の言葉や態度に怒りがわいたとする。そのとき、何故なのか、何故こんな感情が生まれるのか、自分で考える力が求められる。

## 2. 研究方法

東海学園大学保育専攻「家族支援」受講学生71名（うち男子10名）を対象に、質問紙を無記名自記式で行った。家族観に関する調査期日は2015年4月7日に、食生活の実態調査は4月21日に行った。家族観に関する調査は初回講義時である。「家族とは誰を指すのか、家族はどのような存在か」を自由記述で問うた。

食事に関する調査は3回目の講義時に行った。「昨夜と今朝の食事メニューと食事を用意した人、学生と一緒に食事をした人、それぞれ食事をした時間」を自由記述で問うた。

授業で実施した調査結果を報告すること、文章化することについては2016年9月2日の保育ガイダンス時に口頭で学生に伝え同意を得た。

## 3. 調査結果

### (1) 学生の出身地

学生の出身地は名古屋市内を除く愛知県からの通学生が47%、名古屋市内からの通学生が32%、岐阜県からの通学生が8%、三重県からの通学生が6%、その他3県以外の出身者で名古屋市内にひとり暮らしをしている学生が7%であった。

### (2) 家族とは誰を指すのか

表1 家族とは誰を指すのか（数字は%）（N = 71）

	2015年度	2016年度
親と兄弟のみ	20	22
親と兄弟と祖父母	37	34
親と兄弟、祖父母に親戚	14	26
友人など血縁以外	2	11
ペットを含む	27	28

表2 世帯構造別にみた65歳以上の者のいる世帯の推移

	65歳以上の者のいる世帯	全世帯に占める割合 (%)	推計数 (千世帯)						
			単身世帯	夫婦のみ世帯	夫婦の子のみ世帯	親と未婚の子のみ世帯	三世帯	その他世帯	(再掲) 65歳以上の者のみ世帯
平成7年 ('95)	12 695	(31.1)	2 199	3 075	1 636	4 232	1 553	4 370	
10 ('98)	14 822	(33.3)	2 724	3 956	2 025	4 401	1 715	5 597	
13 ('01)	16 367	(35.8)	3 179	4 545	2 563	4 179	1 902	6 636	
16 ('04)	17 864	(38.6)	3 730	5 252	2 931	3 919	2 031	7 855	
19 ('07)	19 263	(40.1)	4 326	5 732	3 418	3 528	2 260	8 986	
22 ('10)	20 705	(42.6)	5 018	6 190	3 837	3 348	2 313	10 188	
25 ('13)	22 420	(44.7)	5 730	6 974	4 442	2 953	2 321	11 594	
26 ('14)	23 572	(46.7)	5 959	7 242	4 743	3 117	2 512	12 193	
			構成割合 (%)						
平成7年 ('95)	100.0	-	17.3	24.2	12.9	33.3	12.2	34.4	
10 ('98)	100.0	-	18.4	26.7	13.7	29.7	11.6	37.8	
13 ('01)	100.0	-	19.4	27.8	15.7	25.5	11.6	40.5	
16 ('04)	100.0	-	20.9	29.4	16.4	21.9	11.4	44.0	
19 ('07)	100.0	-	22.5	29.8	17.7	18.3	11.7	46.6	
22 ('10)	100.0	-	24.2	29.9	18.5	16.2	11.2	49.2	
25 ('13)	100.0	-	25.6	31.1	19.8	13.2	10.4	51.7	
26 ('14)	100.0	-	25.3	30.7	20.1	13.2	10.7	51.7	

資料 厚生労働省「国民生活基礎調査」  
 注 1) 平成7年の数値は、兵庫県を除いたものである。  
 2) 「親と未婚の子のみ世帯」とは、「夫婦と未婚の子のみ世帯」「ひとり親と未婚の子のみ世帯」をいう。

家族とは誰を指すのかという質問に対して、祖父母と両親、兄弟をあげた学生は37%であり、一番多い回答であった(表1)。2016年度調査でも34%の学生が祖父母と両親と回答をしており、やはり一番多かった。厚生労働省「平成26(2014)年国民生活基本調査」の世帯構造別にみた65歳以上の者のいる世帯の推移によれば、三世帯世帯は平成7年は33.3%であるが、平成26年は13.2%になっており大幅に減少していることがわかる(表2)。今回の質問が「あなたにとって家族とは誰ですか。全員書いて下さい」という設問であったため、学生が実際の家族構成員を答えたのか、認識を答えたのか区分けすることが難しいが、本学の保育専攻の学生の学生は三世帯同居をしているのを、もしくは三世帯同居が家族だという認識をしていることがわかる。次に多いのが、ペットを家族とする学生である(27%)。2016年は28%である。友人など血縁以外を家族とする学生が2%いた。2016年度では11%になっている。

(3) 家族はどのような存在か

自由記述で「家族はどのような存在か」問うた。複数記述可である。表2に記載されていた記述を表2にすべて列記した。なお、同じような記述は筆者がまとめた。近い項目をまとめて上から多い順に並べたものである。( )は回答数である。49項目の回答があった。

表3 家族はどのような存在か (N = 71)

◎安心できる、安心感、安心する (13)
○大切、自分より大切、大切にすべき存在、大切にかけがえのない存在 (13)
○●支え、支え合う、支えてくれる存在 (11)
○頼れる、頼る、一番頼りになる、信頼できる存在 (10)
○なくてはならない存在、空気のようになくてはならない (9)
○何でも話せる、不安なこと相談にのってくれる (8)
○一番身近、近い存在、いつもそばに居る、一番身近な他人 (8)
○分かってくれる、理解してくれる、一番の理解者 (6)
○◎落ち着く、落ち着く存在 (6)
○素でいても嫌われない存在、素でいられる場所、何があっても嫌いにならない(なれない) (6)
○◎くつろげる、気楽に過ごせる、気を遣わない (5)

- 助け合いながら暮らす、助け合いながら生活する仲間、助け合える (5)
- わがままを言い合える、何でも (どんなことでも) 言い合える (4)
- 一生を共にする、これからも共に生きる、長い時間を一緒に過ごす人、ずっと一緒にいたい存在 (4)
- 育ててくれた大切な存在、育ててもらった (3)
- こころを許せる、ある程度こころを許せる人たち (3)
- 悩みを相談しやすい人たち、相談相手 (3)
- 味方になってくれる存在、味方でいてくれる (3)
- ダメなときは叱ってくれる、一方喜びも共有してくれる (3)
- ◎帰るところ・自分らしくいられる場所、自分を出せる (3)
- 経験を教えてもらう人生の先輩、手本 (2)
- 温かい存在、温かく迎えてくれるやさしい存在 (2)
- 必ず受け入れてくれる存在、受とめてくれる存在 (2)
- ◎小さな社会 (2)
- ◎ひとつのグループのような存在、◎◎協力して生活する人、◎◎血のつながった人、
- ◎一緒に生活している、◎居場所、◎◎●会話を楽しむ、○必要不可欠な存在、
- 居なくなったら生きていけない、○●一緒に笑う、○甘えられる、●聞きあえる、
- 何かあったときに守ってくれる、○愛情を与えてくれる、○母は友達、○大好き、
- 本音が言える存在、○思い切りぶつかれる存在、○自分のことを心配してくれる存在、○離れたり切れたりすることのない存在、○これから恩返しをする、○朝起こしてくれる、○応援してくれる、○家族皆温かい、○帰ったら必ず居る、
- 真剣に聞き、優しく温かく見守ってくれる存在

ここでは (表 3)、◎は「家族そのもののイメージ」と考えた記述として分類した。○はどちらかという「家族メンバーに対してのイメージ」と考えた分類とした。

●はお互いの関係性が含まれていると分類記・整理した。この表に記述された内容を見ると、学生が家族や家族メンバーに対して抱いているイメージはほぼ肯定的なものであることがわかる。

#### (4) 食事に関するアンケート調査結果

表4 夕食を作った人と誰と食べたか (数字は%) (N=71)

作った人	2015	2016	誰と食べたか	2015	2016
家族	41	54	家族	31	31
自分	21	15	1人	46	44
外食等	27	13	友人	17	17
友人等	3	2	バイト先等	2	8
他	8	17	なし	4	0

\* コンビニでの調達は外食等に含めた

夕食を作った人は41%が家族である (表 4)。学生が作ったのは21%、外食等が27%であった。2016年では、家族が54%である。家族が用意した夕食のメニューは25人が記載していた。メニューを単品として記載していた学生は10名であり、焼きそば、カレーライス、ちらし寿司などの単品が記載されていた。15名は、主菜、副菜がバランスよく配置されたメニューを記載していた。例をあげれば、「豚しゃぶ、サラダ、納豆、味噌汁、果物、ご飯」「カツオのたたき、サラダ、味噌汁、ご飯」「チキンかつ丼、サラダ、味

噌汁」などである。学生が用意した食事は13名が記載していた。主菜、副菜が記載されていた学生は4人である。「魚の煮つけ、もやしと卵の炒め物、野菜スープ、ご飯」「鶏肉巻き、ポテトサラダ、ご飯」「鶏むね肉の照り焼きマヨネーズかけ、ご飯、牛乳」「蕎麦、チーズインハンバーグ、大根サラダ」である。他の学生は、「おからの煮物」「卵焼き、キャベツの千切り、味噌汁」「季節野菜、玉ねぎのとろとろ、ジャガイモのケーキ、チョコプリン」「野菜炒め、ご飯」「ネギトロ」「冷凍うどん」「カレー」「サラダ、ヨーグルト、わらびもち」「カルボナーラ、ハム」であった。

それらの食事を誰と食べたのか問うた質問に対しては、家族と一緒に食事をしたと答えた学生は31%である。一人で食べたと答えた学生は46%であった。また、食事をしなかった学生が4%いた。

夕食の時間	17～	18～	19～	20～	21～	22～	23～	24～
人数	2	9	11	14	6	10	7	2

図1 夕食の時間

夕食の時間は19時から20時台が20人である（図1）。23時以降と回答した学生も9名いた。

作った人	2015	2016	誰と食べたか	2015	2016
家族	43	35	家族	9	19
自分	47	50	1人	64	71
外食等	8	19	友人	5	2
友人等	2	2	なし	18	13
他	0	4	その他	0	0

図2 朝食を作った人と誰と食べたか（数字は%）（N=71）

朝食を自分で用意した学生が47%と多い（図2）。次いで家族、家族と学生が用意したと答えた学生が43%であった。18%の学生が食べていないと答えている。

朝食の内容は、家族、学生が家族とともに用意した朝食では複数のメニューが記載されていた学生は18名であり、単品、例えば、ケーキ、メロンパン、パンなどの記載は7名であった。学生が用意した食事では、複数のメニューが書かれていたのは8名であった。単品、例えば、ご飯、パン、バナナ、野菜ジュースは9名であった。

朝食の時間	5～	6～	7～	8～	9～	10～
人数	1	5	10	17	12	6

図3 朝食の時間

朝食の時間は7時～9時台が39名であった（図3）。通学の関係で5時台、6時台に朝食を摂る学生もいた。10時台は6名であった。

## 4. 考察

家族とは、誰を指すのか問うた質問では、3世代家族と答えた学生が37%であった。「国民生活基礎調査」（表2）では平成26年には3世代同居世帯が13.2%であった。今回の設問が「あなたにとって家族とは誰ですか。全員書いて下さい」というものであったため、学生が認識している家族を書いたかもしれない

いし、実際の家族を書いた学生もいるかもしれない。そこで、この結果を安易に比較して考察はできないが、少なくとも拡大家族を家族と認識する学生が多く、伝統的な家族観をもつ学生が多いといえるのではないだろうか。学生の79%は愛知県内から通学している。93%の学生が愛知、岐阜、三重県出身である。地域性と関連があるのだろうか。

次に多いのが、ペットを家族とする学生である。27%の学生が家族にペットを入れている。2016年度調査でも28%の学生が家族にペットを入れていた。2012年から同様の調査を行っているが、ペットを家族と入れた学生は、2012年には29%、2013年には27%、2014年は26%であり、毎年さほど大きな差はない。上野（2009：6-22）は、ファミリー・アイデンティティ研究において「ペットを家族の境界に含める事例があることがわかった」と記し、山田昌弘が行った調査を引用している。山田昌弘は、2004年に『家族ペット-安らぐのは、あなただけ』を著し、誰でもペットを家族となしうると述べる。さらに、ペットの家族化がおきる理由について「現実の家族がだんだん家族らしくなくなっているからである」（2013：206）と、家族に生じている変化との関連を述べている。

一方で血縁関係以外を家族とする学生が2%いた。この数値は年度によって異なりがある。ちなみに2016年度は11%であり、2012年は17%である。2013年と2014年は本年と同様2%である。この結果から、血縁以外を家族と考える学生がいるということがわかる。上野ら（上野1994、山田2009）は、近年の家族には「家族のゆらぎ」があり、家族範囲意識の変化があると述べる。しかし、今回は伝統回帰のような回答も多くあった。若者が保守化しているのだろうか、揺らいでいるのだろうか、ペットに安らぎを求めているのだろうか。

家族はどのような存在か自由記載・複数回答可で問うた質問に対しては、学生はほぼ肯定的な内容を記述していた。2012年から同じ質問をしてきたが、過去に家族のマイナスイメージを記述した学生は1人だけであった。その内容は「家族は嫌い」というものだった。その時、その記述にホッとしたことを覚えている。その記述に健全さを感じたものだ。「家族は安心できる場所であり、家族といると落ち着くし、気を遣わなくても良い。自分らしくいられる場所であって、自分が出せる場である」これを逆説的に書いてみると、家族以外の場合は、「安心できない。気を遣う。落ち着かない。自分らしく振舞えない」となるのではないだろうか。それが、現代の学生の一側面なのかもしれない。

食事に関する調査を行った後で、NHKアーカイブス「子どもたちの食卓」を視聴し学生に感想を書いてももらった。その映像に、日本、韓国、アメリカの小学生がそれぞれ同じフォーマットである日の食卓の絵を書き、その絵を比較調査した内容が含まれていた。絵の比較から日本の子どもたちが孤食状態にあることが浮き彫りになっていた。日本の子どもたちが、描いた食卓の説明をする際に「寂しかった」「1人で美味しくなかった」と答えていた。外国では家族が揃って食卓を囲んでおり「楽しかった」という感想が大半だった。学生は、この日本の子どもたちの姿に対して「可哀想」「家族と一緒に食事をするのが必要」と感想に書いた。さらに、岩村暢子の『家族の勝手でしょ!』（新潮社）を取り上げ、別の角度から家族の食卓について考えた。この本では、子どものいる家族の食卓の写真274枚が紹介されている。家族めいめいの好きなものを食卓にする写真や、その傾向の写真が多数紹介されていた。これらの写真を分析した岩村氏は、今の主婦たちは「私は私、あなたはあなた。うるさいこと言わないからお互い好きにしましょ。何かあったら言って。出来る範囲でやってあげるわ」という関係を小さい子どもにも求めている（2010：189）と述べている。

食事に関する調査結果では、46%の学生が1人で夕食を摂り、4%の学生が夕食を摂っていないと答えた。朝食は18%の学生が摂っていない。学生は、自分が1人で夕食を摂ることを孤食、個食とは思っていないことがわかった。学生生活にはアルバイト等があり、大学生としての日常生活の延長線上に1人食事があると考えているようだ。授業で取り上げた教材と感想文に自分自身を重ねて考察することはなかった。学生は自分の生活と講義で伝えた問題とを切り離していることが伺える。

## 5. 課題

今回、授業中に実施したアンケート調査を振り返って、以下の課題が明らかになった。

1 つ目はアンケートを行う際は、家族と家族イメージ、つまり事実と認識を分けることが必要だということである。事実を明確にすることによって学生の状況がより明らかになる。

2 つ目は、家族に関する調査内容を広げることである。教育関係の学生の家族観を調査した綿貫（1998）は、調査内容に父親・母親との会話の程度や、親に対する規範の希望などを入れており、「大学生の家族観：家族環境との関連」において、親を見習いたくない人のほうが見習いたい人よりもより柔軟な家族観を持っていると述べ、批判的な見方を取り入れた「家族」学習をすることが必要だと指摘する。

3 つ目は、アンケートのみではなく、家族問題に関する視聴覚教材を見た学生の感想も含めて授業の振り返りを行うことの必要性である。そのことにより、学生の感じたことを授業全体の流れのなかで可視化することが出来て、今後の課題がより明確になる。

4 つ目は、アンケート結果の授業への活かし方の工夫である。アンケートの結果を入れたグループ・ディスカッションを取り入れるなどして、さらに学生自身に自分のことと社会の中でおきていることの関連等を考えさせる工夫が必要だと考えた。学生が能動的に主体的に参加する授業の工夫が必要である。

「家族支援」の授業では学生が自らの体験と重ねて考えてくれることを期待して2012年から同様のアンケート調査を行ってきた。今回、この方法を振り返るために2016年8月に開催された「全国保育士養成協議会第55回保育研究大会」にて研究発表をした。本稿はそのときの報告を加筆修正したものである。

## 附

本研究のアンケート調査に関して、本学の研究倫理委員会（29-12）の承認を得た。

## 参考文献

- F・B・バイスティック著、尾崎新・福田俊子・原田和幸訳 ケースワークの原則 援助関係を形成する技法〔新約版〕誠信書房75-105, 1996.
- 藤田祥子 「家族関係」授業を通してみた女子学生の家族観 奈良教育大学教育研究所紀要23巻 23 - 28, 1987.
- 速水敏彦 他人を見下す若者たち 講談社現代新書5-6, 2006.
- 岩村暢子 変わる家族変わる食卓 真実に破壊されるマーケティング常識, 勁草書房2003.
- 岩村暢子 家族の勝手にしょ！写真で見る食卓の喜劇 新潮社2010.
- 厚生労働統計協会 国民の福祉と介護の動向 55, 2015 / 2016.
- 鈴木敏子 大学生の家族観と家庭科における「家族」に関する題材設定の試み 横浜国立大学教育人間科学部紀要第14巻 29-39, 2012.
- 上野千鶴子著 牟田和恵編 家族の臨界-ケアの分配公正をめぐる-：家族を超える社会学 新たな生の基盤を求めて 新曜社6-22, 2009.
- 綿引伴子 大学生の家族観-家族環境との関連- 金沢大学教育学部紀要第47巻, 255-262, 1998.
- 山田昌弘 家族ペット-安らぐ相手は、あなただけ- サンマーク出版 2004.
- 山田昌弘 なぜ若者は保守化するのか 反転する現実と願望 東洋経済202-2011, 2009.
- 山田昌弘 なぜ日本は若者に冷酷なのか 東洋経済新潮社105, 2013.

